

3 千葉県における自然と人のかかわりの歴史と環境変化

房総半島千葉県の自然環境は、数万年に及ぶ人のかかわりのなかで様々に変貌し、現在の人々の営みを含む生物多様性を形成するに至っている（表1）。

遺跡等から得られる人間活動の証拠は、今から4万年前の旧石器時代に遡ることができる。当時の人の生活は狩猟・採集に依存したものだ。その生活様式は気候が温暖化した縄文時代にも引き継がれ、自然の恵みに依存した暮らしが成立していた。

弥生時代に水田稲作が始まると、自然に働きかけてこれを改変し、食料や生活物資を生産する生活様式が成立し、古代、中世、近世を通じてその技術や規模は発展を続けた。沿岸域においても、ノリの養殖等が発達し、陸上だけでなく海域の利用も同様に進展した。こうした人間活動に伴って形成されたのが里山・里海の景観である。こうした土地利用方法は自然環境の収容力を超えるものではなく、持続可能なシステムとして発展し、江戸時代にその頂点を迎えたといえる。

しかし、明治時代に始まる近代化の波は、それまでの持続可能な土地利用を放棄させ、不可逆的で収奪的な土地利用が急速に拡大した。化石燃料の消費を中心とする、エネルギー供給量の増大、石油化学製品の普及は、大量生産・大量消費・大量廃棄によって支えられる非循環型の消費社会を作り出した。その結果、全地球的規模で進行する気候温暖化も自然のバランスを大きく損なう脅威となっている。こうした自然環境の劣化及び生態系の損傷は、長い間、人為との微妙なバランスによって保たれていた生物・生命のつながりを断ち切り、在来生物の生息・生育環境を奪い、その消失により生物多様性を低下させる反面、外来生物の侵入や特定の野生生物を増加させ大きな農林漁業の被害をもたらした。この状況は人々の自然資源・環境及び身体や心の健康にも様々な影響を及ぼし、我々の生活・文化を含む生物多様性の将来に大きな危機をもたらすに至っている。

今後、千葉県の生物多様性を保全、あるいは復元するに当たっては、ここで整理した歴史的パースペクティブを共有することが重要である。たとえば、ある自然景観を復元する場合、どの時代のどのような景観をモデルとするのかによってその目標は異なるからである。たとえば、狩猟・採集時代の原生的自然景観をモデルとする場合と、江戸時代の里山景観をモデルとする場合では、当然、異なる手法を用いなければならないし、関係者がそのイメージを共有しなければならない。

表1 千葉県における自然と人のかかわりの歴史

	年代	特徴	大まかな時代区分
狩猟・採集の時代	4万～1.2万年前	氷期の自然に依存した生活 <ul style="list-style-type: none"> ・最終氷期(ウルム氷期)の寒冷な気候 ・モミ属、トウヒ属の針葉樹林や落葉広葉樹林の原生林 ・低湿地にはハンノキ林が発達 ・オオツノジカ、ナウマンゾウ等の鳥獣の狩猟 ・山菜、魚貝類等の採集 ・石器の使用 ・人々が集まって作業した痕跡である「環状ブロック」は全国最多 	旧石器
	1.2万～2.4千年前	豊かな自然に育まれた生活 <ul style="list-style-type: none"> ・氷期が終了し温暖化 ・落葉広葉樹林からシイ、カン類等の常緑広葉樹林へ植生変化 ・6千年前の温暖化のピークには海進により低地が入り江化 ・魚貝類の採集と貝塚の形成(世界一の密度) ・シカ、イノシシ、タヌキ、カモ類、クジラ、イルカ等の狩猟 ・ソバ、ゴボウ、陸稲、クリ等の栽培 ・土器の使用 ・石棒、土偶(信仰の萌芽) 	縄文
里山・里海の時代	2.4千～1.5千年前	自然に根ざした生業の開始 <ul style="list-style-type: none"> ・水田稲作の開始 ・低湿地のハンノキ林の水田化 ・台地上に集落と畑の成立 ・畑でのムギ、アワ、ヒエ等の栽培 ・台地上の草原化 ・スギ、マツの植林やクリ、コナラ等の二次林の成立 	弥生～古墳
	1.5千～1千年前	自然に働きかける開墾 <ul style="list-style-type: none"> ・沖積平野における水田の拡大 ・広範囲の灌漑用水系や条里水田の成立 ・谷内や山林の開発の進行 ・内陸の谷津や河川沿いに多くの集落が成立 ・現在の里山景観の原形が成立 	古墳～平安
	1千～400年前	自然を巧みに利用する生業 <ul style="list-style-type: none"> ・用排水技術の発展と大規模区画の水田成立 ・乾田化の開始 ・多様な農作物栽培と農具の発達による二毛作 ・船舶、漁具、水運の発達による沿岸の漁労活動の活発化 ・地域の信仰組織、生活の諸組織の発達による文化、相互扶助の仕組みの形成 	平安～戦国
	400～100年前	自然と調和する生活・生業の極致 <ul style="list-style-type: none"> ・近世村の成立と現代につながる地域の形成 ・都市の発達と急激な人口増加 ・新田開発による食料増産のための農地拡大 ・治水、治山技術の発達、干拓、河道の変更、堤防工事の実施 ・燃料生産のための薪炭林増加 ・スギ、マツ、ヒノキ等の植林増加 ・農法、農機具の発達 ・堆肥、緑肥、干鰯、キサゴ等の肥料の利用 ・漁具、水運の発達やリ養殖による漁業の発展 	江戸～明治
開発・都市化の時代	100～40年前	大規模な自然改変による近代化 <ul style="list-style-type: none"> ・欧米との交流による近代化 ・化石燃料に依存した工業化、機械化による流通の革命 ・市場経済化に伴う商品生産中心の農林漁業への変質 ・都市的な土地利用の拡大 ・国内外の交易拡大による外来生物の増加 	明治～昭和
	40年前～	自然の破壊・汚染による人への危機 <ul style="list-style-type: none"> ・急激な都市化、工業化の進行 ・海岸の埋め立て、山林開発、徹底した農地整備 ・大量生産・消費と大量の廃棄物の発生 ・農薬、化学肥料等の化学物質の大量使用 ・河川、海岸の人工護岸化 ・公害による健康被害の拡大 ・地球規模での気候温暖化の進行 	昭和～平成

4 生物多様性と文化

自然界の生物多様性の一員である人間にとって、自然は、生きる場であり糧であるとともに、一方では困難と苦しみの元でもあった。したがって人間はこの自然及び生物多様性とのかかわりのなかで、土地を耕し (cultivate)、人々の助け合う仕組みとしての社会をつくり、モノを産み、技術を身につけ、また科学を発展させた。この耕作 (cultivation) を軸とする、社会やモノ、技術等を通じた自然と人間のかかわりのなかで創出、蓄積された物心両面の所産が文化 (culture) と言える。したがって文化は、多様な自然環境それぞれに異なり、各地の生物多様性を素材としつつ形づくられていった。

このような文化を具体的に表しているのが、地域の伝承や言い伝え、それらを記録した史料、そして信仰や習俗、また祭祀や儀礼であり、これらは人々の価値観や行動規範となった。人々の自然に対する畏れと尊敬の念、すなわち自然・生命への畏敬の思いは自然を守り生物多様性を育む文化を創出した。文化は、さらに人々のなりわいのなかで地域ごとに特徴的な景観及び自然環境を形作ってきた。

房総半島には、その特有な地形・地質と気候及び生物相と人々の歴史に育まれた豊かな文化が存在し、この人と自然が文化で一体となった空間として里山・里海が認識される。この里山・里海における自然及び生物多様性を守り育む文化は、人々の生活の中で長く伝えられてきた(図7)。

県内には、自然環境や歴史を反映して、地域毎に多様な里山・里海が、地域の文化に支えられ存在していた。それは、過去の開発とその抑制を繰り返す歴史の中でつくられてきたものである。今後も、この里山・里海を支えてきた各地の文化の歴史的形成過程を検証し、生物多様性を守る新たな文化の創出に努める必要がある。

<生活となりわいの文化> 海岸、湖沼、河川、湧水等多様な水環境と肥沃な土壌に穏和な気候、そして農林および海産資源にも恵まれ房総での生活は、自然のリズムのなかでなりわえば、安全に定住し安定した食糧を得ることが可能である。房総の豊かな生物多様性は、多様な食文化をもたらすとともに、特に海産加工品については商用として各地の食文化を支えた。さらに水田の害虫を駆除する鯨油、綿栽培の肥料となった干鰯などの漁業産品は農業を支えた。一方の陸域では、暖温帯性の常緑広葉樹や竹、また冷温帯性の落葉広葉樹や針葉樹が生育し、その林産物からは家屋から生活・生産用具、また燃料に至まで、多様で質の高い生活資材が生産された。特に、豊富な竹材を用いた、カゴや箕、房州うちわ等は工芸品としても優れている。

<神仏への信仰の文化> 人々は、安全や豊作・豊漁の祈願、また家族や土地、家畜の守護、また亡くなりしものの供養等をおこない心の安らぎを求めた。その求め先が、仏や観音、太陽から山、月、水、樹、そして様々な動物に象徴された神々である。馬頭観音、七夕馬、大蛇の辻きり、竜・蛇の水神、庚申塔のサル、キツネの稲荷様等である。御神体を大杉とした神社の他、サケ、カラス天狗、鯨の骨等を御神体とし、また捕獲した鯨を供養する鯨塚や漁撈作業の中で誤って殺してしまった海亀を葬った墓などもある。このような信仰は、人間にとって重要な動植物の保護をはじめ、水源等その生息・生育と結びついた自然環境の保護、さらには境界認識等、社会秩序の維持にも大きな役割を持つ状況が読み取れる。信仰はさらに講をもたらし地域の人々の結束や交流・娯楽にも貢献した。

<祭りや行事の文化> 祭りとは、神霊を招き迎えて慰め和ます集団的な行事である。多くの神霊は農耕や漁業と結びつき、豊作・豊漁への祈願や感謝、また盆行事のように先祖の霊への感謝・供養の行事もある。いずれも神仏の宿場の自然環境の保護の共通理解とともに四季折々の自然の変化のなかでの適切な農作業の記憶の役割を果たし、また農耕活動の陸と漁場の海とのつながりの重要性を認識させる効果のある祭りなども見受けられる。もちろん、娯楽や地域の人々の結びつきを強める場としての意味合いも大きい。



上：栄町で出土された馬や鳥など動物のはにわ（県立房総のむら・風土記の丘資料館）



上：多古町のしいかご舞の面（小林裕美 撮影）



右：市川市のわらの大蛇の辻切り。村境の認識と外からの侵入者を威嚇する。



上：いすみ市の海中桜。大正末期まで大原漁港に見られた里山と里海を結ぶ風習。真水が出水する磯の穴に春、山桜を立て港の入口を示す滞標とした。写真は1998年に再現されたもの（手塚幸夫 撮影）。



上：庚申塔に彫まれた見ざる、聞かざる、言わざる。境界域での軽率な行動を戒める。

右：春の七草。最も身近な野草は貴重な食料でもあった。



図7 生物多様性に支えられ生物多様性を守り育む地域の文化